















































































19……唐津焼の磁器碗である。復原口径12.0cmを測る体部のみの破片である。色調はやや緑がかかった暗灰色を呈し、染付文もほとんど暗緑色に近い色を呈す。模様は口縁部に沿ってX状の重なりを持つもの。体部中央の模様は不明。細かな胎土は暗灰色で、貫入も多くみられる。

20……染付の瓶子である。体部中央に呉須で描かれた模様は、濃技法をも用いて淡青色を呈するが、いかなる模様かは不明。ロクロ使用による成形で内面には横ナアの痕跡。もちろん釉はかかっていない。胎土は細かく白灰色を呈す。貫入は全くみられないが、気泡の痕跡あり。

21……灰釉系統の瀬戸碗である。底部のみの破片で高台径5.0cmを測る。釉は肩方畳付を除いて全面に施釉。高台はやや高く、兜巾の痕跡が認められる。胎土はやや砂っぽい白黄色で、細な貫入が夥しい。

22……灰釉系統の瀬戸碗である。復元口径9.6cm、器高7.3cmを測る。前記0.11とほとんど同じであるが、兜巾を消し取ってあるのと体部表面に気泡の痕跡が目立つのが特徴的である。内面見込みに重ね焼きの痕跡。

(17c後～18c初)

13……備前焼の種壺である。復原口径は14.0cmを測り、やや小型の壺である

ということが出来る。

口縁部のみの破片である。表面は暗茶褐色を呈し横描波状文を有する。胎土は赤茶褐色で砂粒を若干含む。

(16c後半)

(梅田)



第29図 陶磁器



















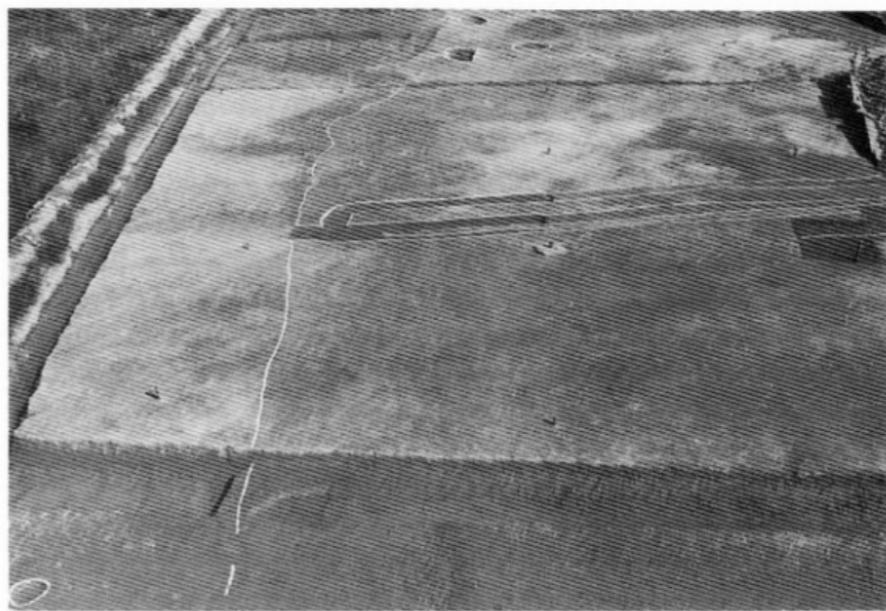
全景 (調査前、東より)



第1区 東より



遺構全景 南より



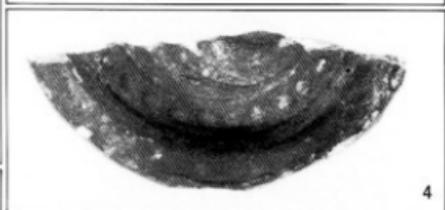
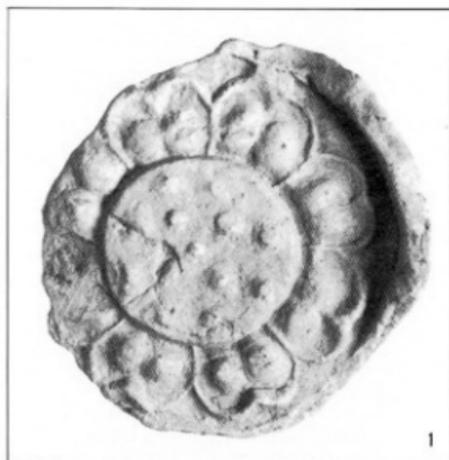
同上 北より



SK-A



SK-B



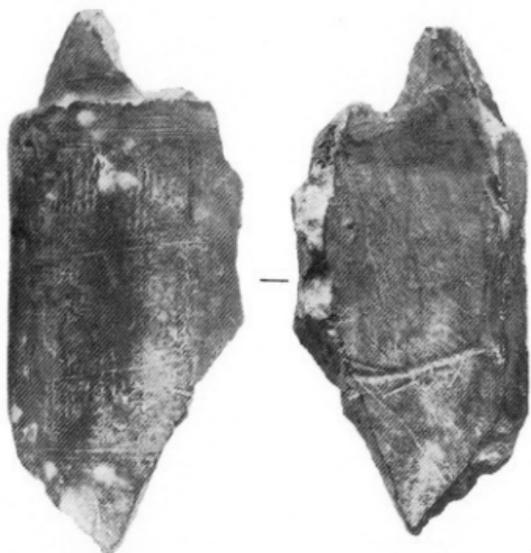




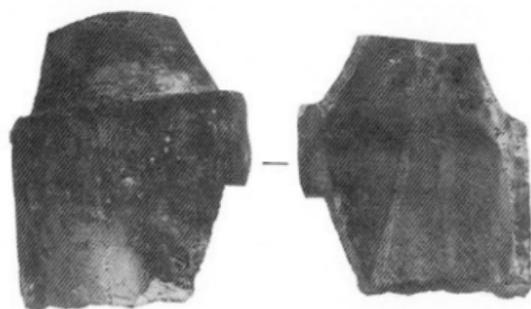
1

2

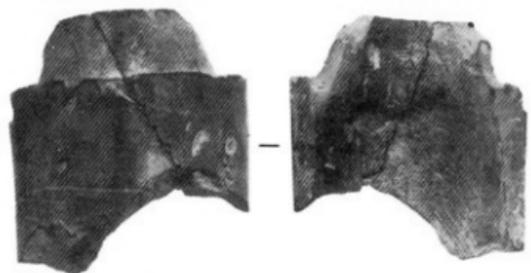
3



2

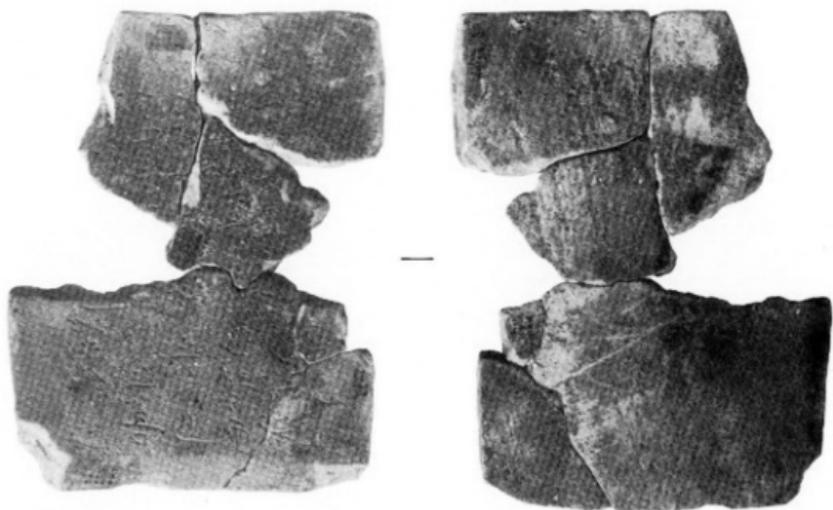


3

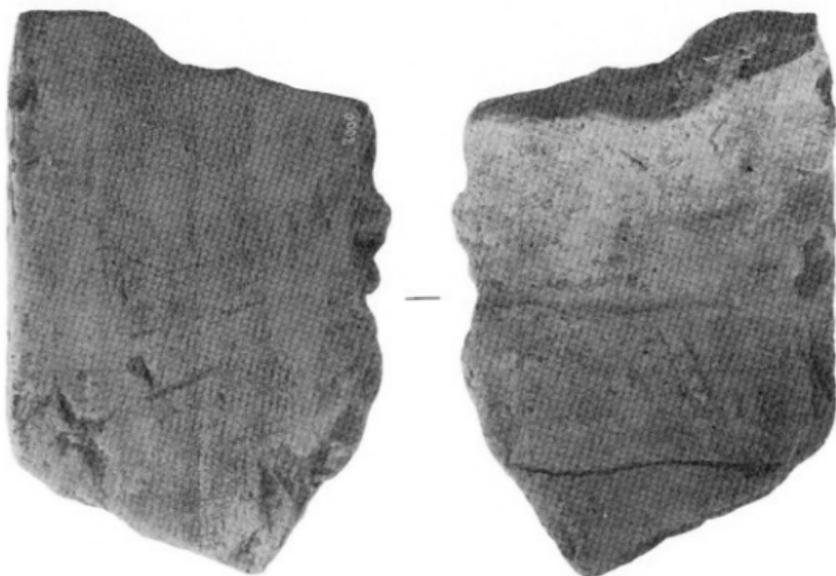


4

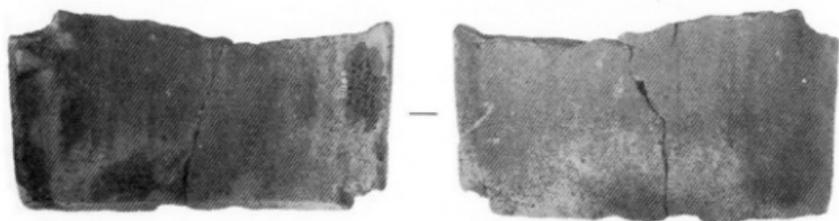
1



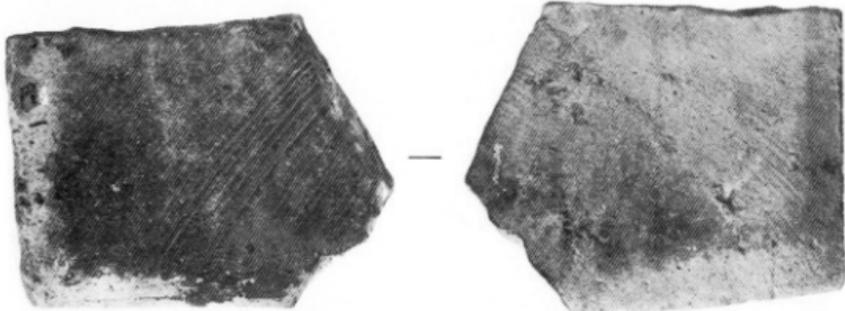
1



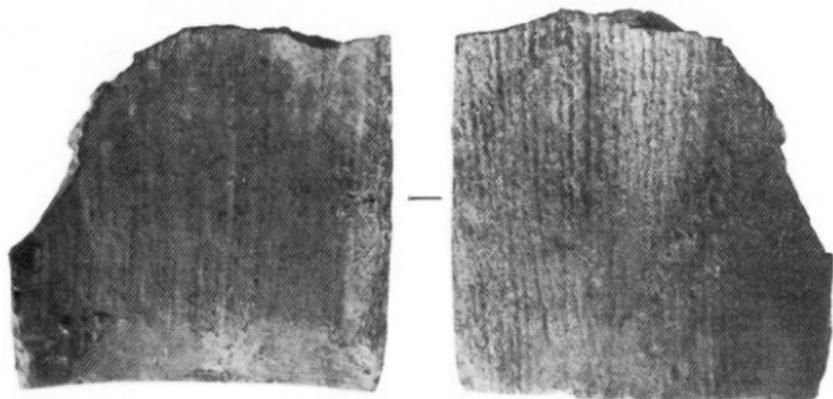
2



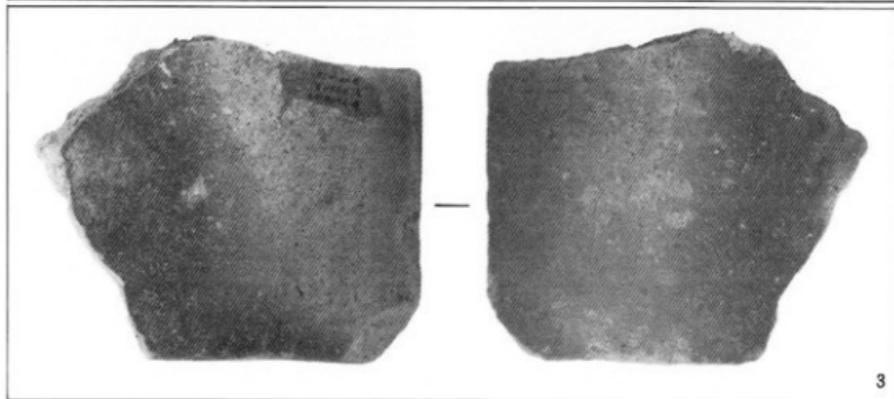
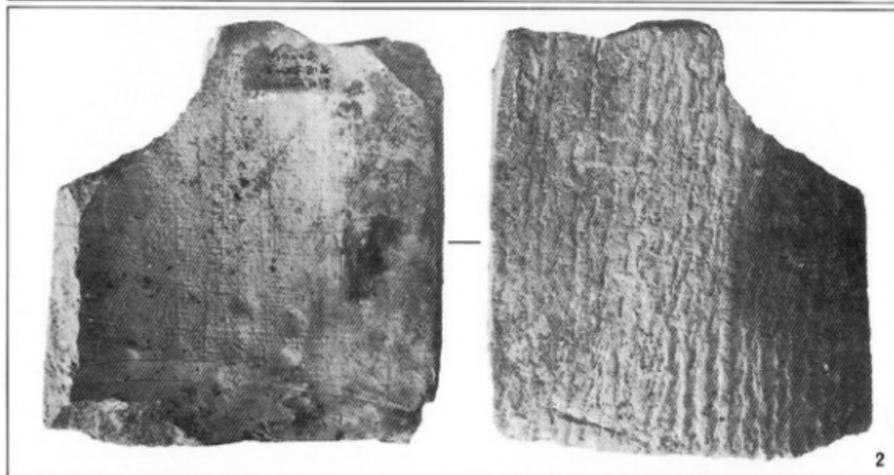
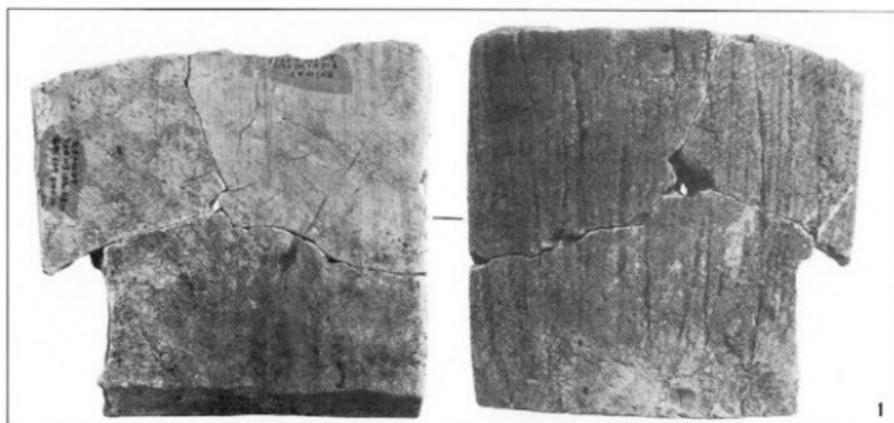
1

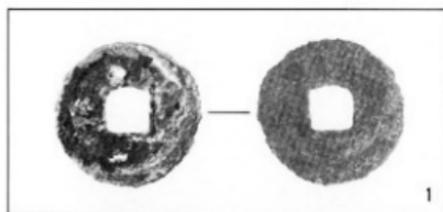


2

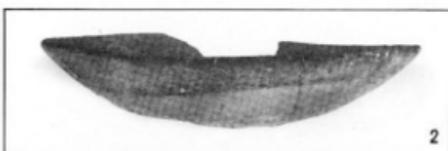


3

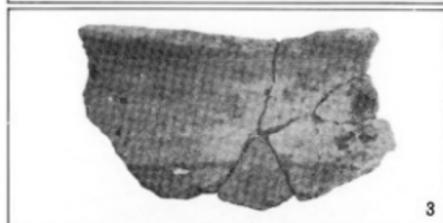




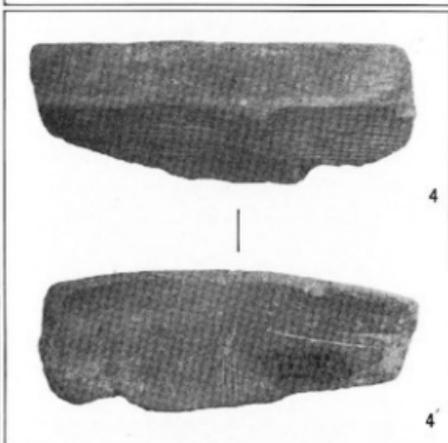
1



2

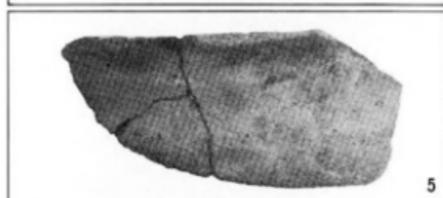


3

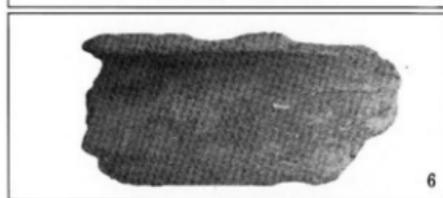


4

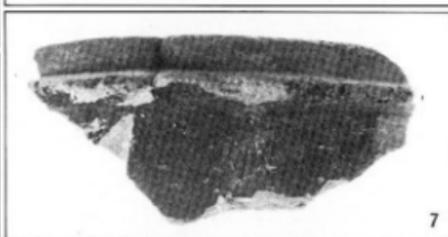
4



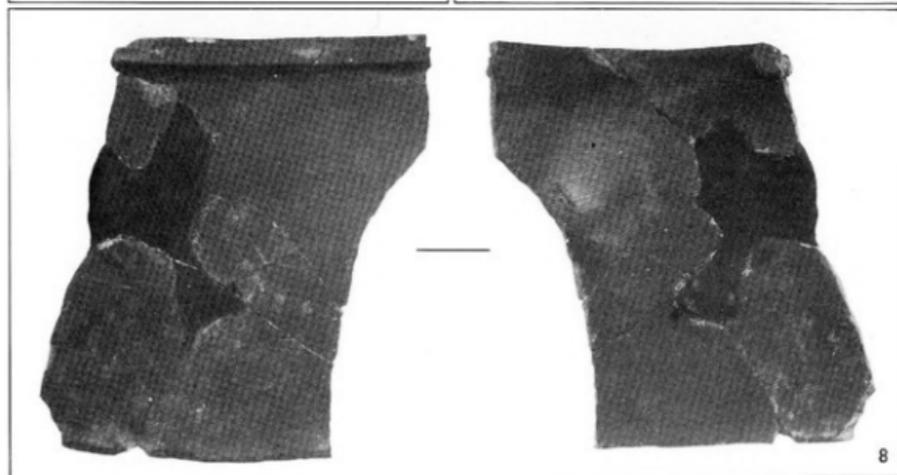
5



6



7



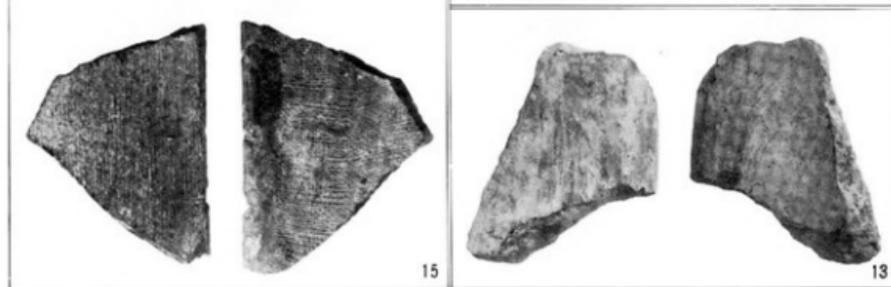
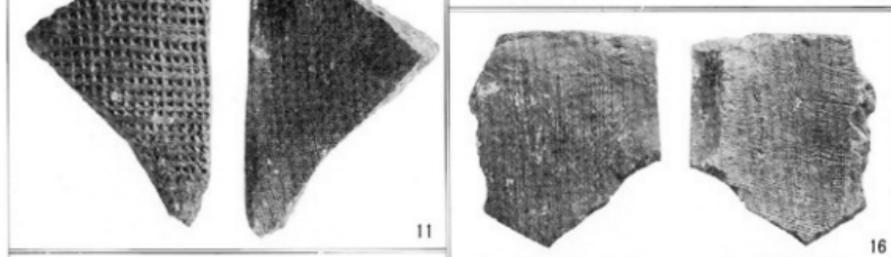
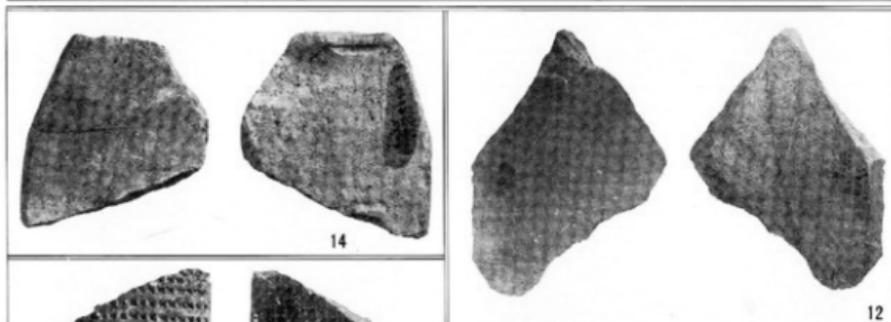
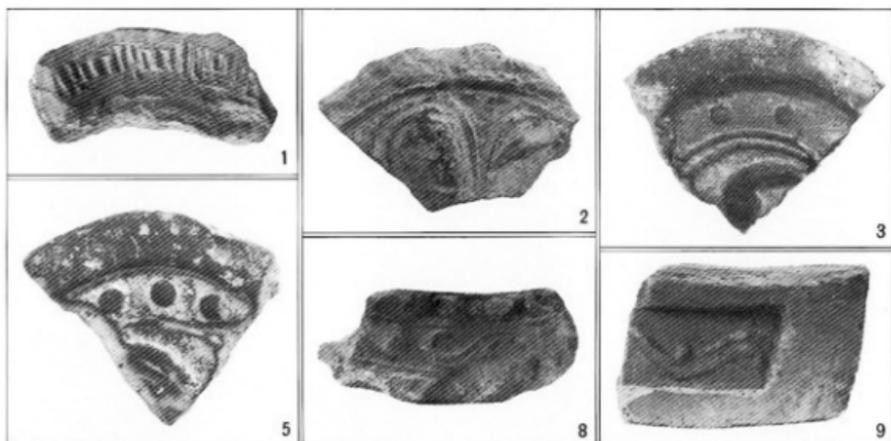
8



遺跡遠景



調査区全景





5



2



10



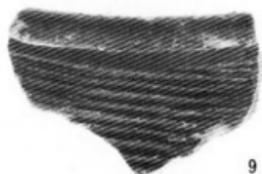
8



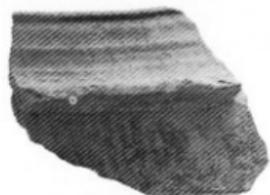
4



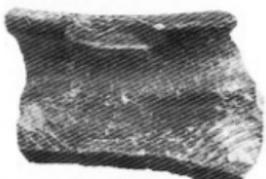
11



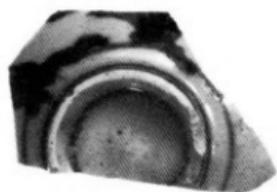
9



1



12



23



16



18



24



15



25